

オバマ時代のポピュラー・ミュージック (1) : レディ・ガガの“Born This Way”とマックルモアの “Same Love”にみる性的マイノリティ表象

佐久間 由 梨

◆はじめに

アメリカのポピュラー・ミュージックは、古くから社会的な役割を果たしてきた。アメリカの音楽ジャンルの多くが、黒人奴隷の音楽に起源を持つことがその理由の一つである。奴隷制時代の黒人霊歌は、ゴスペル、R&B、ソウルへと発展し、1960年代の公民権運動期には人種差別の不正義を暴き、権利獲得への希望を表現した。奴隷解放後に生まれたブルースに起源をもつロック・ミュージックは、ベトナム戦争期に愛と平和と反戦を求める若者たちの対抗文化を彩った。特定の人種、性別、性的指向、移民、宗教などに対する偏見や差別へと抗議し、少数派の存在を可視化し、被抑圧者の権利獲得、平等、平和を志向する。このような差異の承認と平等への要請を内包するポピュラー・ミュージックは、娯楽としての役割に加え、社会的かつ倫理的な役割を果たしてきた。

本稿はポピュラー・ミュージックをめぐる社会性や倫理性についての先行研究を、21世紀のアメリカという現代的文脈へと接続しつつ、オバマ政権からトランプ政権誕生期（2008年から2017年）のポピュラー・ミュージックの動向を検証していく。オバマ時代のポピュラー・ミュージックはいかなる社会的メッセージを発していたのか。主な分析対象は2000年代以降の音楽の流通には不可欠となったミュージック・ビデオ及び、各年に話題となったアーティストのショーケースともなっているグラミー賞授与式におけるパフォーマンスである。特に焦点を当てるのは、レディ・ガガ、マックルモア&ライ

アン・ルイス、ケンドリック・ラマー、ファレル・ウィリアムズ、ビヨンセといった日本でもよく知られているアーティストである。上記アーティストの作品が、ポストレイシャルな社会という理想を背景としながら、黒人と性的マイノリティの視点からアメリカを描き出していることを論じていく¹。

後述するように、オバマ時代のアメリカにおいては相反する二つの世論が浸透し、ポピュラー・ミュージックにも影響を与えた。マイケル・テスラー

(Michael Tesler) の *Post-Racial or Most-Racial?: Race and Politics in the Obama Era* の表現をかりれば、最も楽観的な世論は、オバマ時代が「ポストレイシャルな社会 (post-racial society)」——肌の色がもはや問題とはならない多様性と平等に彩られる社会——の到来を象徴しているというものである。一方、悲観的な世論は、オバマ時代が米国史上「最も人種的な社会 (most-racial society)」として、不平等や不正義の問題が顕在化し再燃した時代であるというものだ。後者の世論は 2014 年以降、白人警官による黒人青年射殺事件が表面化したこと、その結果として **Black Lives Matter** (黒人の命も重要だ) と呼ばれる抗議活動が全美で展開されたこと、刑事司法および監獄制度が少数派にとって不利益なものであることが明るみにでたことなどにより浸透した。

本稿はレディ・ガガの “Born This Way” (2011) とマックルモア & ライアン・ルイスの “Same Love” (2012) という楽曲を分析していく。両作品がポストレイシャルな社会という理想像を背景に、性的マイノリティの存在を可視化しつつ、両者の権利獲得の必要性を訴える媒体であることを示したい。一方で、次稿にて論じるように、2014 年以降に主流となっているのはファレル・ウィリアムズ、ケンドリック・ラマー、ビヨンセラ黒人アーティストによる抗議色の強い楽曲およびパフォーマンスだ。**Black Lives Matter** に共鳴するこれらの楽曲は、「最も人種的な社会」を特徴づける制度的人種差別への抗議声

¹ 本稿は、上廣倫理財団研究助成による研究「21 世紀におけるポピュラー・ミュージックの倫理学——ミュージック・ビデオと音楽フェス」の成果の一部である。「オバマ時代のポピュラー・ミュージック (1)」では、性的マイノリティの権利獲得を主題とするレディ・ガガおよびマックルモアの楽曲に焦点を当てる。今後執筆する予定の続編「オバマ時代のポピュラー・ミュージック (2)」ではケンドリック・ラマーやファレル・ウィリアムズの楽曲を、オバマ政権期の人種問題及び **Black Lives Matter** との関連にて論じる予定である。

明であると同時に、なぜ多様性や平等が理想とされる社会においていまだに不平等が蔓延しているのかという問いを各聴衆が再考することを促す倫理性を持ち合わせている。

◆バラク・オバマの演説にみるポストレイシャルな社会という理想

一般的にポストレイシャルな社会とは、法的な人種差別が撤廃された公民権運動以降の時代において「遺伝的特質、祖先の人種、肌の色により、個人の機会が決定されることのない社会」と定義される (Rich 3)。個人が人種的アイデンティティや外見ではなくその中身や人格により評価されることを前提とするポストレイシャルな社会においては、「カラーブラインドネス (color-blindness)」という考え方が重要視される²。これは「公共政策や日常的な交流の場において、人種は無視されるべきである」という見解で (Hayes)、この特定の文脈においては、大学入試や就職活動において特定の人種や民族集団に対してのみ行われる差別是正措置 (アファーマティヴ・アクション) は不平等であり人種主義的であると捉えられる。

選挙期間中から、オバマの身体はポストレイシャルおよびカラーブラインドといった表現と共に解釈される傾向が強かった (もちろん次稿で示すように真逆の解釈も存在する)。自伝『合衆国再生——大いなる希望を抱いて』においてオバマ自身が語るように、オバマの身体は「真っ白なスクリーンのように、さまざまな政治観を持つ人々からいろんな見解を投げかけられる」媒体としての機能をはたしてきた (16)。歴史家のトーマス・サグルー (Thomas Sugrue) によれば、多くの国民はこの「アフリカ系とヨーロッパ系の祖先が混じることによる新しいハイブリッド」としてのオバマの身体(スクリーン)

² 「カラーブラインドネス」という考え方の起源は 1895 年に人種分離を合法化したブレッシー対ファーガソン判決において、人種分離に反対したジョン・マーシャル・ハーラン判事が発した言葉にあるという。ハーランは「我々の憲法はカラーブラインドであり、アメリカ市民内の階級格差を認めることも許容することもない」と述べ、アメリカの憲法があらゆる偏見を持たぬべきであると主張した。「カラーブラインドネス」という考え方の歴史については Ian F. Haney-López の“Is the Post in Post-Racial the Blind in Colorblind?”が詳しい。

に「人種を超越した」アメリカ像を投影したのだという。オバマの身体が象徴する混血性は、人種優越主義に固執する白人だけではなく、分離主義的なアイデンティティ・ポリティクスを信奉する黒人両者に異議申し立てを行うに十分であった(1)。さらに、アメリカに根付く「一滴の血のルール」によれば黒人とみなされるオバマは、それにもかかわらず大統領にまでのぼりつめた人物として、人種にかかわらず成功の機会がひらかれたポストレイシャルなアメリカの象徴としても受けとられた。むろん、いかにオバマの身体が「人種を超越して」いるように見えたとしても、いかにオバマが「人種にかかわらず」成功できる社会を象徴しているとしても、オバマ自身は21世紀においても人種差別が現在進行形の問題であることを熟知しており、アメリカがいまだポストレイシャルな社会には至っていないことを強調する³。

とはいえ、オバマの基本姿勢はやはり、アメリカが人種や性別などにかかわらず努力次第で万人に成功への道がひらかれた多様性と機会の平等という理想に彩られた国家だということを、高らかに歌い上げることであった。この点においてオバマはポストレイシャルなアメリカ社会が到来するという理想や希望を人々に伝える伝道師のような役割を意識的に果たしてきたのだ。2012年の再選演説には端的にその理想が表現されている。

懸命に働けば、あなたが誰であろうが、どこから来ていようが、どのような見かけだろうが、何を愛していようが問題ではないのだ、というアメリカの建国者たちの約束を守ることができると信じています。あなたが黒人でも白人でも、ヒスパニックでも、アジア系でも、ネイティヴ・アメリカンでも、若者でも高齢者でも、裕福でも貧しくても、健常者でも障がいを持っていても、同性愛者でも異性

³ 自伝『合衆国再生——大いなる希望を抱いて』の一章分は人種問題の議論に充てられており、その中でオバマはこのように述べている。「わたしの演説をもってこの国が“ポスト人種差別時代の政治”に到達したとか、すでに肌の色で差別されない社会になっているとする批評家たちの解釈が耳に入るとき、わたしは警告を發せずにはいられない。わたしはひとつの国民だとは言ったが、人種問題はもうないとのめかしたわけではない(260)。南川文里の『アメリカ多文化社会論——「他からなる」の系譜と現在』は、「ポストエスニック」の象徴でもあるオバマが、実際にはアメリカの人種主義と対峙する姿勢を持つことを詳細に論じている(171-173)

愛者でも関係ありません。もしあなた方が進んで挑戦するならば、ここアメリカでは成功することができるのです。（“Obama’s Re-election Speech”）

建国の父たちの存在が浮かび上がらせるのは、建国当初の自由と平等の理念からは排除されていた人々の存在、すなわち、人種や民族、性別、性的指向、障がいなどによって差別や偏見に苦しんできた人々の存在である。「あなたが〜であろうが関係ありません（It doesn’t matter whether you’re black or white or Hispanic or Asian or Native American or young or old or rich or poor, abled, disabled, gay or straight）」というレトリックにより、オバマは人々の差異がもはや重要な問題とはならない来るべき未来への展望を表している。

興味深いことに、オバマのポストレイシャルな理想社会においては性的マイノリティの存在が不可欠である。アメリカの大統領としては初めて性的マイノリティへの支持を明言したオバマは「ゲイ・プレジデント」と呼ばれたこともあった（Sonmez）。2012年の再選演説においては「同性愛者でも異性愛者でも」「何を愛していいようが問題ではない」ことを力強く主張したオバマは、2015年、最高裁判決により同性婚が憲法上の権利として認められた機会に、再び性的マイノリティの存在と国家の多様性とを結びつけながら、同性婚の合法化を祝している。

我々は大きく、広大で、多様である。つまり異なる背景と信念、異なる経験や物語を持つ人々の国家なのです。しかし、我々は、たとえあなたが誰であろうと、どのような見かけであろうと、どのような出自を持とうとも、どのようにそして誰を愛していいようと、アメリカは自分自身の運命を描くことのできる国家であるという共有された考え方により結び付けられているのです。（“Remarks”）

オバマは多様性や差異をアメリカの特色として肯定し、人々がその差異にもかかわらず、運命を切りひらく機会の平等性という共有された信念により結びつけられているのだと語る。この演説において、オバマがポストレイシャ

ルな社会への理想を表現するために使うのは「たとえあなたが誰であろうも、どんな見かけであろうとも関係ない」という意味を持つ“no matter who you are or what you look like”という表現である。先述した“*It doesn't matter*”と共に、この表現もまた、人々の差異が等価なものとして認識され、もはやその差異によって個人が差別されることのない理想社会を描きだすのである。

◆レディ・ガガの“*Born This Way*” (2011)

レディ・ガガとマックルモアは、ポストレイシャルな社会という理想が共有されたオバマ時代を代表するかのような白人アーティストである。両者は共に性的マイノリティの権利獲得運動に積極的にコミットする活動家でもあり、自身もバイセクシャルであることを公表しているレディ・ガガは、性的マイノリティの権利獲得運動における「非公式のアイコン」ともみなされ、同性婚の合法化になかなか踏み込まぬオバマ大統領に対する声明を發したことも知られている(Solis)。マックルモアは白人異性愛者のラッパーとして、黒人が主導するヒップホップ界の逆人種差別(黒人側からの白人差別)、女性嫌悪、同性愛嫌悪を問題視しつつ、自身の白人としての特権についても言及を怠らぬ高い社会意識を持ち合わせる⁴。両アーティストの楽曲は、いかにオバマ時代のアメリカを映しだしているのか。

“*Born This Way*”は2011年にリリースされ、同年のMTVビデオ・ミュージック・アワードにおける最優秀女性ビデオ賞も受賞するなど高い評価を得た作品である。同作品が多様な少数派を可視化し、その差異を肯定する目的を持つことは歌詞を見ると明らかだろう。

⁴ マックルモアが自身の白人としての特権に意識的であることは、“*White Privilege*” (2005) および “*White Privilege II*” (2016) といった楽曲にも表現されている。Jon Caramanica, Gene Dembyはそれぞれ、マックルモアの白人性を照らし出す記事をニューヨークタイムズおよびNPR (National Public Radio) に執筆している。

I'm beautiful in my way
'Cause God makes no mistakes
I'm on the right track baby
I was born this way
Don't hide yourself in regret
Just love yourself and you're set

私は自分らしく美しい
神様が間違えることはないから
私は正しい道を進んでいるの
私はこんな風に生まれついたのだから
後悔の中に隠れないで
ただ自分自身を愛すればよいの

Whether you're broke or evergreen, you're black,
white, beige, chola descent, you're lebanese, you're
orient, whether life's disabilities
Left you outcast, bullied, or teased, rejoice and love
yourself today, cause baby you were born this way
No matter gay, straight, or bi, lesbian, transgendered
life, I'm on the right track baby, I was born to survive

文無しだろうと裕福だろうと、黒人、白人、ペー
ジュ、ヒスパニック系の子孫、レバノン人、東洋人
だろうと、障害者だろうと、仲間外れにされ、いじ
められ、からかわれていたとしても、今日は自分
を祝い、愛しましょう
あなたはこんな風に生まれついたのだから
同性愛者、異性愛者、バイセクシャル、レズビアン
、トランスジェンダーでも、私は正しい道を進ん
でいるの
私は生き延びるために生まれたのだから

本楽曲の歌詞は、人種や民族（黒人、白人、ヒスパニック、レバノン人、東洋人）、性的指向（同性愛者、異性愛者、バイセクシャル、レズビアン、トランスジェンダー）、さらに障がいの有無という差異を並列させ、それぞれに違いこそあれ「私は正しい道を歩んでいる（I'm on the right track）」こと、つまり万人の生き方は等価なのだというメッセージを伝えている。

多様な人々の等価性を祝す歌詞は、人々が平等に評価され、その差異がもはや問題とはならぬポストレイシヤルな世界観を描きだしているようにみえるだろう。しかしながら“Born This Way”は、万人の等価性という理想をかかげつつも、等価性が同質性へと回収されてしまうことへの激しい抵抗をも表現している。いいかえれば、“Born This Way”は、一方では「カラーブラインド」の理念に基づきつつ少数派を普遍化し、差異がもはや問題とならない地平を表象しながらも、他方では非常に「カラーコンシャス」とも呼べる作品で、差異を各個人に固有の要素として本質化することで、それに基づくアイデンティティ・ポリティクスを展開する楽曲でもある。この二重性は必ずしも本楽曲においては矛盾や欠点となっているわけではなく、むしろ魅力の源泉となっている。オーディエンスはそれぞれの立ち位置やニーズに応じて本楽曲に多様な解釈を投影することができるのだ。

まず“Born This Way”をカラーブラインドという観点との結びつきにおい

て解釈してみたい。“Born This Way”において人々の差異がもはや問題とはならないポストレイシャルな世界観が最も顕著に映しだされているのはMVの冒頭場面である。この場面でレディ・ガガは「マザー・モンスターの声明 (“Manifesto of Mother Monster”）」を読みあげ、レディ・ガガが扮する母の子宮から新しい生命体が生まだされていく様子が映されていく。レディ・ガガは自身をマザー・モンスターと称し、リトル・モンスターと呼ばれるファンたちと疑似的な血縁関係を演出することでファンとの絆を確固たるものに行っていることで知られている。冒頭の出産場面はこの疑似的母子関係を再現するものでもあるが、同時にポストレイシャルな新世界の誕生を表象する場面としても解釈可能である。レディ・ガガのナレーションは、母が「単一の秩序を持たぬ世界 (the multiverse)」をさまようなかで新たに生み出された生命体が「偏見や批判を持たず、際限のない自由を持つ人種 (a race which bears no prejudice, no judgment, but boundless freedom)」であると定義する。単一の秩序 (規範) を持たぬ世界、さらに、偏見から完全に解放された新人種という表現は、オバマが語るような差異がもはや問題とはならぬカラーブラインドな社会、ポストレイシャルな社会をも想起させるものだろう。「同性愛者、異性愛者、バイセクシャル、レズビアン、トランスジェンダーであろうも、私は正しい道を進んでいるの」と自信をもって歌うレディ・ガガはこの点において、「あなたが誰であろうとも、どんな見かけであろうとも問題ではない」と高らかに歌いあげるオバマとも共鳴しているのだ。

しかしながら、本楽曲は楽観的にポストレイシャルな社会像を提供しているだけではない。レディ・ガガのナレーションは、カラーブラインドな秩序に特徴づけられる新世界が誕生したのと同じ日に「悪」が誕生し、母が「善」と「悪」との間で揺れ動き分裂することになったのだと続ける。「悪」の誕生により、差異が問題とはならぬカラーブラインドな世界は、差異が意識的に問題化されるカラーコンシャスとも呼べる別世界へと一変する。レディ・ガガのナレーションは以下のように続いていく。

母が二つに分裂し、二つの究極の力の間で揺れ動くと、選択肢という振り子がダンスを始めたのです。善へと迷いもなく引き寄せられるこ

とが簡単だと想像するかもしれません。でも、彼女は迷ったのです。悪が存在なくして、私はこの完璧なものを守れるのだろうか。（“The Manifesto of Mother Monster”）

カラーブラインドな秩序を持つ新世界とは対照的に、この「善」と「悪」とが対立する別世界は絶対的な二元論に基づいている。おそらく、この二元論的世界こそが、現代アメリカの鏡像である。とりわけ、母（マザーモンスター）が二つに分裂し「善」と「悪」との間で揺れ動く振り子となる様子は、レディ・ガガがこの別世界において「善」（主流派）と、「悪」（少数派）との間で揺れ動いていることを比喩的に示していると理解することもできるだろう。白人男性異性愛の主体が規範として、すなわち「善」としてまかり通ってきたアメリカ社会において、その規範からの差異は「悪」、ならびに劣等、逸脱、病理といった烙印を負わされてきた。レディ・ガガのナレーションは迷いながらも「悪」の存在を肯定しているように聞こえるが、それはマイノリティが「善（主流派）」に同化し、自らを普遍化し、その差異をなくすよりもむしろ、主流派によって「悪」と名付けられた差異を引き受け、肯定し、それを堂々と可視化しながら保持し続けることを良しとしているからである。

MV の冒頭部にはこのように、カラーブラインドな世界とカラーコンシャスな世界とが二重に表現されている。楽曲の中間部以降においては後者の主題がより前面に押し出され、“Born This Way” が差異を固有のアイデンティティとして引き受け可視化していくというアイデンティティ・ポリティクスに基づく楽曲であるという印象を強めていく。たとえば楽曲のタイトルでもあり、歌詞においても反復される “Born This Way” という表現は、差異を持つ人々が「そう生まれついた」こと、つまり性的アイデンティティが生まれつきの素質であり、「神」こそがその素質の創造者であるという考え方を示すものである。それは「私なりの美しさがある / 神様は間違えることはないから (I’m beautiful in my way / ‘Cause God makes no mistakes)」、「ありのままの自分を愛することは悪いことじゃないのよ / 母はそう言ったの、だって神様はあなたを完璧に創造したのだから (There’s nothin’ wrong with lovin’ who you are / She said, ‘cause He made you perfect)」といった歌詞にも明らかだろう。

ここで、「生まれついた」差異という見解が、性的アイデンティティを人種のそれと並列させることにより、より説得力あるものになっていることが重要である。人種の特徴（肌の色や髪質）と同じように性的アイデンティティもまた生来的なものであるという理解が示されているのである。

「善」と「悪」とを対立的に表象しつつ、両者の差異を「生まれついた」ものと捉える本楽曲は、カレン・マクファレン（Karen Macfarlane）が指摘するように「他の本質と二項対立的な関係を結ぶ本質の象徴」のようにも見えるだろう（125）。「善」と「悪」、そしてそれらが象徴する男性/女性、同性愛/異性愛、白人/非白人といった対立を本質化し、固定化してしまっているような印象を与えるのだ。このように人々の差異が「生れついたもの」であり「神意」や「運命」であると捉えることに対しては、批判も寄せられている。批判の多くはミーチャ・カルデナス（Micha Cárdenas）のように“Born This Way”が「生物学的決定論者のアンセム」になってしまっていること（178）、つまり、性的アイデンティティを生物学的に決定されるものとして扱っていることに向けられている。アンドレア・ミラー（Andrea Miller）も本楽曲が「社会学者が絶え間なく避け続けてきた還元主義的かつ本質主義的なパラダイム」に基づいていると指摘する（17）。性的アイデンティティが生来的なものなのか、社会的に構築されるものなのか、あるいは個人の選択なのかについては、明確な科学的根拠はない。それにもかかわらず、“Born This Way”が差異を本質化するようにも見える歌詞と映像を持つのはなぜだろうか。

一つの答えとして、サマンサ・コーヘン（Samantha Cohen）が指摘するように、戦略的にアイデンティティを本質化するアイデンティティ・ポリティクスが、性的マイノリティの権利獲得運動には有益に働きうることが挙げられるだろう。アラン・ブランチ（Alan Branch）によれば、“Born This Way”における「性的指向が生来的なもの、神から与えられたものである」という前提は、「同性愛的な生活様式を実践する人々に倫理的批判が向けられるべきではない」という結論を導くことができるのだという（16）。「神」という人知を超越した存在に創造され「そのように生まれついた」のだから、個人を責めることなど誰にもできない、責めるのなら神様を責めるべきであるという主張をすることができるようになるのである。

戦略的な差異の本質化は、レディ・ガガだけではなく、一般的な性的マイノリティの解放運動においても見られる傾向だという。アイデンティティ・ポリティクスの利点および限界について、人種、ジェンダー、セクシュアリティなどの観点からまとめるクレシダ・ヘイズ (Cressida Heyes) によれば、少数派の差異を本質化しながら可視化するアイデンティティ・ポリティクスは、一方で少数派の団結を促す効果があるが、他方で「自己を定義する際に自己ではない他者を想定する必要がある、それにより二項対立や階層主義を強化してしまう」危険性を孕んでいる。いいかえれば、アイデンティティ・ポリティクスは、性的マイノリティの解放運動が本来目指すべき、男性/女性、異性愛/同性愛などの二項対立的カテゴリーならびに異性愛規範の脱構築を行うよりもむしろ、ともすれば二項対立を強化させ、異性愛規範を強めてしまうという欠点を持ち合わせるのだ。

フェミニズムはこのような理由もあり、男女の差異を本質ではなく構築されたものとみなす傾向がある。対照的に、同性愛者解放運動においては、このような欠点が認識されているにもかかわらず、いまだにアイデンティティの本質主義的理解が根強く残っているのだという。ヘイズの分析によれば、この背景にあるのは戦略的に差異を本質化することが、同性愛嫌悪からの防御手段になりうるという認識である。同性愛嫌悪者や保守派は、性的マイノリティが「不道徳的な欲望を自らの意志によって変えることができるのだ」と主張する傾向がある。これに対して当事者たちは性的アイデンティティを生来的なもの——ガガの言葉を借りれば「生れついたもの」——と戦略的に本質化することで、性的指向を自らの意志や治療によって変えることなどできないのだという対抗言説を主張できるようになるのだ。

“Born This Way” のサビ部分にある「ほかの道なんてない (there ain't no other way)」という歌詞は、戦略的な本質主義という視座から解釈した場合、少数派が自身の差異を強制的に消失させるよりもむしろ、差異を保持したままのありのままの自分として生き続けることを促すものだ。そして、「私は生き延びるために生まれたのだから (I was born to survive)」という力強い歌詞が象徴する「生」への意志が共有されていくのである。

まとめれば、“Born This Way” は、一方では差異が問題ではなくなるポスト

レイシャルな世界観を表象し、他方では差異を戦略的に可視化しつつそれを個人の特性として賞賛する楽曲である。近年勃興したレディ・ガガ・スタディーズの知見によれば、レディ・ガガのセクシュアリティ表象および彼女の身体は、このように矛盾し合う要素を含みこみながらも、その矛盾を意味の多義性という特質として提示することに成功している。サリー・グレイとアニューシャ・レトナム (Sally Gray, Anusha Rutnam) は、レディ・ガガの多義的な意味を生成させる身体や衣装に着目し、彼女が現実レベルでの権利獲得運動と結びつく「ゲイ」(アイデンティティ・ポリティクス) という枠組みにおいても、ジェンダーやセクシュアリティのカテゴリーを脱構築しようとするポストモダンな理解における「クイア」の枠組みにおいても、さらにスーザン・ソントグ (Susan Sontag) らが理論化した「キャンプ」という枠組みにおいても解釈できるのだと指摘している (51)。“Born This Way” もまた、果たしてその世界観がカラーブラインドなのか、あるいはアイデンティティ・ポリティクスなのかという議論を巻き起こしつつも、両者を呑みこむかのような意味の多義性を生成する媒体として人気となったのだと思われる。本楽曲がオバマが演説にて描き出したようなポストレイシャルな社会という未来像を描いていることは確かである。同時にそのような未来がいまだ到来していない現実社会を見据えながら、今現在、少数派として日々闘う人々へとエールを送っているのだ。

◆マックルモア&ライアン・ルイスの “Same Love”

白人ヒップホップアーティストのマックルモア&ライアン・ルイスは“Born This Way” の翌年となる 2012 年に “Same Love” を発表した。本楽曲は元々はワシントン州の同性婚の是非を決定する住民投票に向けた「結婚平等計画のための音楽 (Music for Marriage Equality Project)」として作成されたものであるという。マックルモアの他の楽曲が人気になるにつれ “Same Love” も瞬く間に人気となり、「ビルボードチャートの 40 位以内に入り込んだ楽曲としては初めて、同性婚を扱いそれを支援した曲」として『ニューヨークタイムズ』紙などでも取り上げられるようになった (McKinley)。

“Same Love” は “Born This Way” よりも直接的に同性婚の合法化を要請する内容となっている。本楽曲の歌詞は「小学校3年生の時自分がゲイだってわかった」から始まる同性愛者男性の自伝的な語りである。異性愛が規範とされる社会において、同性愛者として思春期をむかえ大人になるまでの過程が当事者の視点から語られ、同性婚が合法化される必要があることが主張されていく。歌詞と同様にMVも同性愛者男性の誕生から亡くなるまでを時代順にさかのぼる伝記的な形式となっている。冒頭は黒人の父親と白人の母親とが手を握り合う出産の場面で、主人公である混血の少年が生まれる。少年の成長をたどりながら、異性愛社会において同性愛者の少年が感じる様々な違和感、差別、マイクロアグレッションなどが映し出されていく。例えば幼少期の場面では、女の子はお人形遊びをし、男の子は外でボール遊びをする様子が映され、異性愛規範に基づくジェンダーロールが幼少期から刷り込まれていく様が描かれる。主人公の少年は高校時代には自身の同性愛者としてのアイデンティティをはっきりと認識しており、高校生たちが普通に行う遊びや通過儀礼が異性愛中心主義であることに対しての違和感や戸惑いを隠すことができない。男女が輪になり座り、ボトルをまわし、ボトルの口が向いた人物とキスをするゲームが行われる中、主人公の青年は少女とキスをすることにに対して違和感を抱く。高校のダンスパーティーでは、スロウなテンポの曲がかかると、友人たちは男女でペアになりダンスを始めるが、ただ一人寂しそうに立ちすくむ少年の姿が映される。やがて成人した主人公には白人男性の恋人ができ、二人は結婚式をあげ、映像の最後の場面では、年齢を重ねた白人男性が主人公を看取っている場面、二人の白と茶色の手が握り合わされている場面が映し出されている。

“Same Love” には “Born This Way” と同じ特徴がある。第一に性的アイデンティティを人種的アイデンティティと重ねあわせながら戦略的に本質化していること、第二に「神」(宗教)の問題を扱っていることである。第一の点からみてみたい。“Born This Way” が人種と性的アイデンティティとを並列させることで、性的アイデンティティを「生まれついた」ものとして表象しているように、“Same Love” も人種をめぐる権利獲得運動の歴史を経由しながら、性的マイノリティのアイデンティティを定義しようとしている。

Gay is synonymous with the lesser
It's the same hate that's caused wars from religion
Gender to skin color the complexion of your pigment
The same fight that lead people to walk-outs and
sit-ins,
It's human rights for everybody
There is no difference
Live on! And be yourself!

And I can't change
Even if I tried
Even if I wanted to
And I can't change

ゲイは劣等と同じ意味になる
宗教、ジェンダー、肌の色、色素による外見をめぐる戦争を引き起こした嫌悪と同じ、人々をデモ行進や座り込みへと導いた闘いと同じなんだ
万人のための人権
違いなんてない
生き続けよう！自分自身でいよう！

私は変わることができない
努力したとしても
そう望んだとしても
私は変わることができない

上記の歌詞において、21世紀における同性婚の合法化を目指す闘いは、1960年代の公民権運動期に黒人たちをデモ行進や座り込みへと導いた闘いと同じものとして提示され、両者が共に「人権」を求めるという点においては「違いなんてない」のだと主張される。映像においても人種と性の重なりは明確で、主人公と恋人との恋愛模様を映し出す映像のなかにはしばしば1960年代の公民権運動期の画像が挿入される。キング牧師の演説場面の写真、黒人の少女が「私たちは最高裁判所を信じる (We Believe in the Supreme Court)」と書かれたプラカードを持つ写真などは、人種分離政策が合法か違法かの是非を問うた公民権運動期を想起させるものである。さらに、本楽曲はサウンド的にも公民権運動に言及している。“Same Love”は教会の讃美歌のようなメロディーで始まるが、これは黒人アーティスト、カーティス・メイフィールドが作曲し、公民権運動期である1965年に発表した“People Get Ready”という曲からのサンプリングである。黒人霊歌に影響され、奴隷制の歴史をもその主題として含む“People Get Ready”は、音楽的にも“Same Love”を黒人の権利獲得運動や人種差別の歴史と結び付けている。

1960年代の公民権運動と、21世紀の同性愛者の権利獲得運動とを重ね合わせることで、“Same Love”の歌詞は性的アイデンティティを「変わることができない」もの、つまり皮膚の色や髪質などのように不変的かつ生来的な特

質として表している⁵。レディ・ガガの場合と同じく、このような主張の背後にあるのは、仮に性的アイデンティティが可変的あるいは選択的なものならば、治療により治すことができるのだから、そうすべきであるという保守派の主張である。事実、“Same Love” の歌詞には「保守派はゲイであることは本人の意思決定なのだと考えていた / 同性愛は治療や宗教で直せるのだというんだ (The right-wing conservatives think its a decision / And you can be cured with some treatment and religion)」と記されている。このような保守派の見解に対抗するために、“Same Love” もまた戦略的に本質化を行っていると考えられる。

“Born This Way” において「神」は「生まれついた」差異の作者とみなされていたが、“Same Love” において「神」は「全ての子らを愛する」存在として登場する。しかし “Same Love” は同時に、聖書の内容が西洋のキリスト教社会においては誤まって解釈され、同性愛者への抑圧を生む元凶に成り果ててしまっていることを非難している (『神は全ての子らを愛する』ということが忘れられてみたい / 3500 年前に書かれた聖書の内容を捻じ曲げて解釈しているんだ) [And “God loves all his children” is somehow forgotten / But we paraphrase a book written thirty-five hundred years ago]。MV の映像も教会が同性愛者の少年を抑圧する場となっていることを示している。教会の十字架の映像と、黒人たちを抑圧してきた K.K.K. の燃える十字架の映像とが映されることで、キリスト教により正当化されてきた人種差別と性的マイノリティへの差別の歴史が重なるのである。

“Same Love” はこのように黒人と性的マイノリティの権利獲得運動を連動させることで、1960 年代の公民権運動の成果として少なくとも法的には人種間の平等が達成されていること、そして 21 世紀、今度は性的マイノリティが同性婚の合法化という法的権利を手に入れる番なのだというメッセージを発している。映像において主人公が黒人と白人の両親のもとから誕生したこと

⁵ レディ・ガガの場合と同じく、マックルモアにもアイデンティティを本質化していることへの批判が向けられている。たとえば Brandon Ambrosino は当事者として、選択により性的マイノリティとなった経緯を説明し、“Same Love” が間違ったメッセージを送り出していると述べる。

は、公民権運動の成果として異人種間の結婚が合法的に認められていることを示すものだ。一方、本楽曲のリリース時のアメリカにおいては同性婚はいまだに違法であり、性的マイノリティへの偏見は根強いままである。映像においては、父親（黒人）が同性愛者の息子を認めることができない様子が映される。息子が白人男性（恋人）を家に招いたとき、黒人の父親は同じテーブルで食事することを拒むが、これは異人種間で付き合うことに対してではなく、同性同士で付き合うことに対する嫌悪反応の顕れである。

MV では、主人公が恋人の男性と結婚式を挙げ、多くの観客に祝福される場面がクライマックスとなっている。この場面には、楽曲発表当時には合法化されていない同性婚が近い将来、必ず合法化されるだろうという確信がにじみでる。“Born This Way” の映像が誕生の場面から始まるように、“Same Love” の映像も、同性愛者の主人公が誕生する場面から始まることで、万人に結婚の権利が与えられる新社会が誕生する希望を歌っているのだ。もちろん歌詞にも記されているように、同性婚の合法化によって全てが解決するというわけではないが、小さな一歩にはなりうるという希望である（「嫌悪に満ちた世界 ありのままの自分であるよりも 死んでしまいたいと思う人だっている / 法的証明書だけで / 全てが解決することはない でもはじめの一歩としては十分」[A world so hateful, some would rather die than be who they are / And a certificate on paper / Isn't gonna solve it all, but it's a damn good place to start]）。

このように、“Born This Way” と “Same Love” には共通点が多くあるが、相違点も存在する。それは性的マイノリティの「差異」を前面に押し出すか、あるいは「同質性」を前面に押し出すかという違いである。先述したように“Born This Way” は性的マイノリティの差異を「悪」と結び付けながら表象しつつも、それが劣等なものではなく等価であるという解釈とともに可視化していた。レディ・ガガの楽曲には、性的マイノリティが独自の差異を捨て去ることへの拒否反応および、ファッションや行為において非規範的であることへの志向が明らかである。“Same Love” も同性愛者の視点から「僕はみなと同じではないかもしれない (I might not be the same)」と歌い、性的マイノリティと主流派とが「同じではない」という見解を示すが、歌詞は即座に「で

もそんなことは重要ではない (But that's not important)」と続く。“Born This Way”とは異なり、“Same Love”は差異よりも、たとえ同性愛者であれ異性愛者であれその「愛」は「同じ」なのだという「同質性」を強調する。それは「同じ愛」という意味を持つ「セイム・ラブ」というタイトルにも示されており、同性愛が、男女の愛や親子の愛となんら変わりのない、同じ価値を持った愛なのだということが念押しされる。もちろん、MV に表象されているように、異性愛が規範とされる社会において、性的マイノリティは日常の様々な場面で差別やマイクロアグレッションを経験する。このような側面を考えた時、同性愛者と異性愛者の経験自体が完全に「同じ」であるとはいえない。しかし“Same Love”は両者が「違う」のだと結論づけその分離を説くことはせず、むしろ両者の「愛」が「同じ」であるという認識を基盤とし、性的マイノリティが主流社会において普通に隣人として受け入れられることの大切さを切実に訴えているようにみえる。

“Same Love”の同質性への志向を、近年の「ポスト・ゲイ」という言説との関連で考えることもできるかもしれない。1998年からを「ポスト・ゲイ時代」と位置付けるアミン・ガジアニ (Amin Ghaziani) によれば、「ポスト・ゲイ」は英国人のジャーナリストが1994年に使用し始めた言葉で、アイデンティティをセクシュアリティの観点からのみ定義しないという態度を意味しているのだという (“The Queer Metropolis” 315)。これは、同性愛がクローゼットに隠され孤立し、恥、罪、恐れといった感情とともに理解されていた時代、さらには国家的に病理化されてきた時代をへて、同性愛者のカミングアウトや可視化、社会的承認が進んだ現代のアメリカやイギリスにおいては、『誰を愛するか』と『権利』の欠如以外に、同性愛者が異性愛者と変わらないことを説く同化主義的な言説」としても理解されている (Davidson 140)。

“Same Love”のMVはこのような「ポスト・ゲイ」時代を反映するかのようになり、主人公をセクシュアリティという観点からのみ表象することはしない。主人公は同性愛者であるが、白人と黒人の混血でもあり、おそらく中産階級の健常者でもある。“Same Love”はこのような主人公を通じて、複数の要素が交差することで、あるいは複数の場所に帰属することでアイデンティティが生み出される時代を表象しているのである。同性愛者であるという意味に

においては、主人公は少数派である。一方で、性別、階級的地位、健常者であるという点において、彼が主流派に属していると考えられることもできる（スーツを着て仕事をすることが映され、家庭環境も経済的に恵まれている様子が映されている）。少数派であるか多数派であるかが、必ずしも性的アイデンティティのみでは決定されないことを示しつつ、MV は主人公をもっぱら社会の被害者や弱者としてのみ表象することを避けようとしているようにみえる。

“Same Love” が仄めかすポスト・ゲイ時代は、ポストレイシャルな時代という言説と完全に一致することはなくとも地続きの関係にあると言えるだろう。オバマは、アメリカにおいては「異なる背景と信念、異なる経験や物語を持つ」人々が、機会の平等性という共有された考え方により結びつけられる理想郷を描いた。“Same Love” の MV に映し出される結婚式の場面において、人種や性のカテゴリーを超えた多様な人々が愛の等価性という共有された信念を基盤として結びつけられていく様子は、オバマの演説を思い起こさせるものだ。オバマと “Same Love” が理想とする世界において、もはや人々の外見やアイデンティティの差異は重要な要素とはならない。全ての差異が等価で、平等の機会を持ち、そして等しく愛されるのだから。

2014 年のグラミー賞において “Same Love” は 7 つの主要なグラミー賞部門のうちの 4 部門を受賞するという快挙を成し遂げた。同年のグラミー賞授与式のパフォーマンスにおいても、ポストレイシャルなアメリカ像が実演されている⁶。黒人女性ヒップホップアーティストであるクイーン・ラティファが「この歌は一部の人々のためではなく、すべての人々のためのラブソングです」と紹介すると、グラミー賞会場にネオンライトの教会が出現し、マックルモアが現れ “Same Love” を披露し始める。教会となった舞台にはサビの部分の歌う白人レズビアン歌手であるメアリー・ランバートが登場し、バックステージではニューオリンズ出身のトロンボーン・ショーティに率いられたバンドと黒人から成るゴスペル聖歌隊が歌う。ここにも人種とセクシュア

⁶ 授賞式の映像は YouTube で見ることができる：“Grammy’s 2014 Macklemore & Ryan Lewis, Mary Lambert and Madonna – SAME LOVE” video posted on YouTube on January 27, 2014, <https://www.youtube.com/watch?v=-q5u9kvxX6I>.

リティの重なりを見ることができる。黒人の伝統音楽であるゴスペルの聖歌隊を配置することで、同性愛者の権利獲得運動が人種差別撤廃運動の延長戦上にあるという考え方を再提示している。やがてクイーン・ラティファが舞台(教会)の中心に立ち、牧師の役割を演じて結婚式が始まると、33組のカップルが観客席に登場し、指輪を交換し合う場が映し出されていく。白人、黒人、アジア人、同性愛者、異性愛者からなる様々な組み合わせのカップルたちが互いに永遠の愛を誓うなか、マドンナが大歓声のなか登場し “Open Your Heart” を歌う。

クイーン・ラティファは「あらゆる音調 (key) と色合いの人々の愛と調和を祝福する為に私たちはここにいます。(中略) 世界中の人々が立会人として見つめています」と発言し、TV を視聴する観客が、多様な人種や性的指向を持つカップルの結婚式に、立会人として参加することを求める。かくして、2014年のグラミー賞は、ポストレイシャルな社会が演じられ、視聴者にその社会への参加を要請する空間と化したわけであるが、この背景にはオバマ大統領が幾度となく主張したポストレイシャルな社会という理想像がある。

ここまで示してきたように、レディ・ガガとマックルモアの楽曲は、性的マイノリティのアイデンティティを戦略的に本質化しつつ、人々があるままの自分で生き続けることを肯定し後押しした。さらに両楽曲は、マイノリティの差異を特殊化するか普遍化するかについては異なる見解を提示しているものの、あらゆる差異が等価に扱われ、もはや人々の差異が幸福の実現や成功の妨げにはならぬ来るべき未来への希望を音楽的に再現したといえるだろう。

◆おわりに

2011年の “Born This Way”、2012年の “Same Love”、2014年のグラミー賞での大々的な結婚式のパフォーマンスをへて、2015年にアメリカ全土で同性婚が合法化された。合法化への世論を推し進めるうえでポピュラー・ミュージックが果たした役割は小さくはないだろう。

最後に、次稿への伏線として、このような性的多様性を祝す楽曲が、人種

差別をすでに解決されたものとして提示する傾向があることについては賛否両論があることを指摘しておきたい⁷。2011年から2014年まではレディ・ガガとマックルモアの活躍も一要因となり、「同性愛者は新たな黒人である (Gay is the New Black)」といった言説が生みだされ、すでに権利を獲得した黒人に次いで、今度は性的マイノリティが権利を獲得する時代なのだという見解が浸透した (Robinson 1013)。

しかしながら、実際には人種差別は現在でも根強く残っている。次稿で詳しく論じるように、2014年以降、法的には権利を獲得したはずの黒人たちへの制度化された人種差別や暴力の現実が表面化し、ポピュラー・ミュージック業界においても黒人の権利を再び問い直すアーティストの存在感が増していった。2014年以前にはレディ・ガガやマックルモアといった白人アーティストによるポストレイシャルな社会の「誕生」を予見する楽観的な楽曲が人気になったこととは対照的に、2015年以降は、相次ぐ白人警官による黒人青年銃殺事件を主題とした「死」をめぐる悲観的な楽曲、さらには、社会抗議のメッセージが明確な楽曲が、グラミー賞およびMTVのミュージックビデオ賞においても数多くノミネートされた。アメリカがポストレイシャルな社会とは程遠い人種差別社会であるという問題提起が、2015年以降のグラミー賞のパフォーマンスでも主流となっていく。

“It doesn’t matter~” や “no matter~” というレトリックで、人種や性別がもはや問題とはならぬアメリカ像を描きだしたオバマ大統領もまた、2014年以降、Black Lives Matter という運動の名前にも如実に示されるように、黒人の命が「重要である (matter)」現実へと引き戻されていく。

Works Cited

Ambrosino, Brandon. “I Wasn’t Born This Way. I Choose to Be Gay: Macklemore Sends the Wrong LGBT Message in ‘Same Love’.” *New Republic*, 29 Jan. 2014,

⁷ Russell K. Robinson は“Marriage Equality and Postracialism”において、同性婚の合法化を目指す活動および、それを後押しするマックルモアらの楽曲が、すでに人種問題を解決されたものとして提示することが問題視し、性的マイノリティが安易に人種問題を自身の活動の比喩あるいはモデルとすることに対して警鐘をならしている。

- <https://newrepublic.com/article/116378/macklemores-same-love-sends-wrong-message-about-being-gay>. Accessed 10 January 2018.
- Branch, J. Alan. “‘A Gay Gene?’: Homosexuality, Biology, and Philosophy of Science.” *Don’t Ask, Don’t Tell: Homosexuality, Chaplaincy, and the Modern Military*, edited by John D. Laing and Page Matthew Brooks, Resource Publications, 2013, pp. 15-53.
- Caramanica, Jon, “The Rapper Discusses his New Album with Ryan Lewis and Music as a Tool for Change.” *New York Times (Online)*, Feb. 26 2016, <http://www.nytimes.com/2016/02/26/arts/music/popcast-macklemores-aesthetic-mission.html?partner=bloomberg>. Accessed 21 January 2018.
- Cárdenas, Micha. “Blah, Blah, Blah: Ke\$ha Feminism?” *Journal of Popular Music Studies*, vol. 24, no. 2, 2012, pp. 176-95.
- Cohen, Samantha. “Traductor, Traditore: (Un)translating Born This Way’s Duplicitous Message.” *Gaga Stigmata*, 26 July 2011, <http://gagajournal.blogspot.com/2011/07/traductor-traditore-untranslating-born.html>. Accessed 1 January 2018.
- Davidson, Guy. “The Time of AIDS and the Rise of ‘Post-Gay.’” *The Cambridge Companion to American Gay and Lesbian Literature*, edited by Scott Herring, Cambridge UP, 2015, pp. 139-156.
- Demby, Gene. “I Guess We Gotta Talk About Macklemore’s ‘White Privilege’ Song.” *NPR (Online)*, Jan. 29 2016, <https://www.npr.org/sections/codeswitch/2016/01/29/464752853/i-guess-we-gotta-talk-about-macklemores-white-privilege-song>. Accessed 21 January 2018.
- Ghaziani, Amin. “Post-Gay Collective Identity Construction.” *Social Problems*, vol. 58, no. 2011, pp. 99-125.
- . “The Queer Metropolis.” *Handbook of the Sociology of Sexualities*, edited by John DeLamater and Rebecca F. Plante, Springer, 2015, pp. 305-332.
- Gray, Sally, and Anusha Rutnam. “Her Own Real Thing: Lady Gaga and the Haus of Fashion.” *Lady Gaga and Popular Music : Performing Gender, Fashion, and Culture*, edited by Martin Iddon and Melanie L. Marshall, Routledge, 2014.

- Haney-López, Ian F. "Is the Post in Post-Racial the Blind in Colorblind," *Cardozo Law Review* vol. 32, 2011, pp 807-831.
- Heyes, Cressida. "Identity Politics." *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Summer 2016 Edition), edited by Edward N. Zalta, 23 Mar. 2016, <https://plato.stanford.edu/entries/identity-politics/>. Accessed 1 January 2018.
- Lady Gaga. "The Manifesto of Mother Monster." *GENIUS*, <https://genius.com/Lady-gaga-the-manifesto-of-mother-monster-lyrics>. Accessed 1 January 2018.
- Macfarlane, Karen E. "The Monstrous House of Gaga." *The Gothic in Contemporary Literature and Popular Culture: Pop Goth*, edited by Justin Edwards and Agnieszka Soltysik Monnet, Routledge, 2013, pp. 114-134.
- McKinley, James C. "Stars Align for a Gay Marriage Anthem." *New York Times*, 30 June 2013, <http://www.nytimes.com/2013/07/01/arts/music/stars-align-for-a-gay-marriage-anthem.html>. Accessed 1 January 2018.
- Miller, Andrea D. "The-Miseducation of Lady Gaga: Confronting Essentialist Claims in the Sex and Gender Classroom." *Teaching Gender and Sex in Contemporary America*, edited by Kristin Haltinner and Ryanne Pilgeram, Springer, 2016, pp. 15-26.
- Obama, Barack. *The Audacity of Hope : Thoughts on Reclaiming the American Dream*. Three Rivers Press, 2006.
- . "Obama's re-election speech." *BBC News*, 7 Nov. 2012, <http://www.bbc.com/news/world-20236369>. Accessed 1 January 2018.
- . "Remarks by the President on the Supreme Court Decision on Marriage Equality." *The White House: Office of the Press Secretary*, 26 June 2015, <https://obamawhitehouse.archives.gov/the-press-office/2015/06/26/remarks-president-supreme-court-decision-marriage-equality>. Accessed 1 January 2018.
- Rich, Wilbur C. *The Post-Racial Society Is Here: Recognition, Critics and the Nation-State*. Routledge, 2013.
- Robinson, Russell K. "Marriage Equality and Postracialism." *USLA L. Rev.* vol. 1010, 2014, pp. 1010-1081.

- Solis, Michael. “Lady Gaga and Obama for Gay America.” *Huffpost, The Blog*, 18 Mar. 2010, https://www.huffingtonpost.com/michael-solis/lady-gaga-and-obama-for-g_b_318088.html. Accessed 1 January 2018.
- Sonmez, Felicia. “Barack Obama: ‘The First Gay President?’” *The Washington Post*, 14 May 2012, https://www.washingtonpost.com/blogs/election-2012/post/barack-obama-the-first-gay-president/2012/05/14/gIQAD3YLOU_blog.html?utm_term=.8d77642e5bd3. Accessed 1 January 2018.
- Sugrue, Thomas J. *Not Even Past: Barack Obama and the Burden of Race*. Princeton UP, 2010.
- Tesler, Michael. *Post-Racial or Most-Racial?: Race and Politics in the Obama Era*. U of Chicago P, 2016.
- Williams, Juliet. “‘Same DNA, but Born this Way’: Lady Gaga and the Possibilities of Postessentialist Feminisms.” *Journals of Popular Music Studies*, vol. 26, no. 1, 2016, pp. 28-46.
- バラク・オバマ、棚橋志行翻訳『合衆国再生——大いなる希望を抱いて』ダイヤモンド社、2007年。
- 南川文里『アメリカ多文化社会論——「他からなる一」の系譜と現在』法律文化社、2016年。